2 「登研会」の発足まで

登戸研究所には生田周辺の 10 代の若者が雇員・工員として多く雇用されていました。図 3 が示すように，終戦直後のお正月には地域の若手元勤務員を中心に集まる機会があったようです。こういった地域のつながりを基に，1962（昭和 37）年に，第一回「登研第四科会」が開催されます。これは元軍人を中心に結成された軍関係の OB 会とは性質を異にし，地域の若手の元勤務員が中心となって結成され，女性も会の運営の中心として活躍しました。

図 3　1946（昭和 21）年お正月に集まった元第三科北方班員

第四科と第二科は業務上密接なつながりがあったため，1963 年には第二科と第四科合同で名簿が作成されます。この第二科・第四科会がのちの「登研会（とけんかい）」の母体となります。しかし，まだ登戸研究所の全容，特に第二科の活動について公に語られることはありませんでした。

図 4　第一回登研四科会　1962（昭和 37）年 7 月撮影

1946（昭和 21）年	地域の元若手勤務員ら，お正月に集まる
1950（昭和 25）年頃	三科会が自然発生的に結成される
1961（昭和 36）年	米国の秘密戦に携わっていた「GPSO」関係者，名簿作成
1962（昭和 37）年	第一回登研第四科会
1963（昭和 38）年	第二科と第四科 OB の名簿作成
1982（昭和 57）年	登研会発足

表 1　登研会が発足するまでのあゆみ

生物化学兵器，毒物謀略兵器開発の中心だった第二科の活動については，帝銀事件との関係でメディアに取り上げられることはありましたが，元所員自らが語ることは永らくありませんでした。しかし，一つの転機が訪れます。

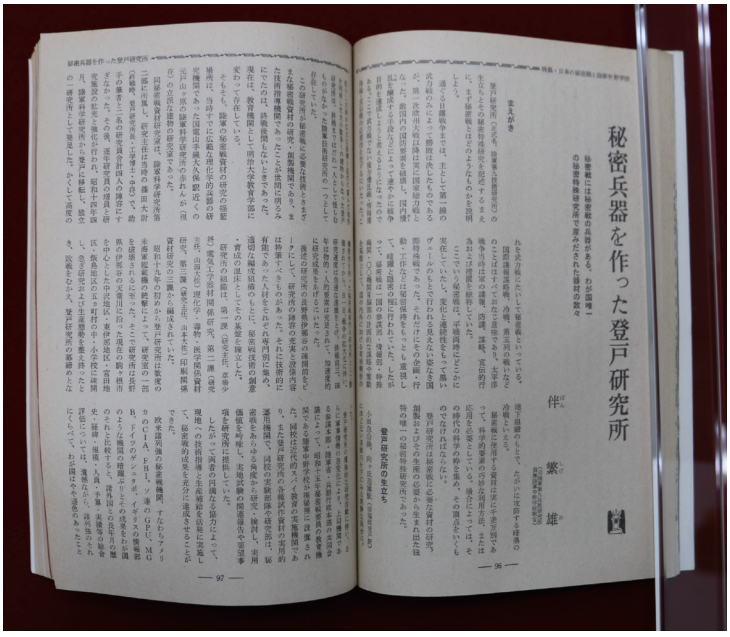
1980（昭和 55）年 10 月，伴繁雄（第二科第一班長）が実名を出して，雑誌『歴史と人物』10 月号（中央公論社）に第二科の活動を発表します。この記事を通じて登戸研究所に関心をもったテレビ関係者は，登戸研究所についての番組制作にとりかかります。この取材過程で，伴は明治大学生田キャンパス内に登戸研究所の遺構がまだ残っていることを初めて知ります。

図 5　TV 撮影で戦後初めて生田キャンパスを訪れた山本憲蔵
偽札印刷工場（上）と偽札製紙工場（下）前で当時を懐かしむ。1981（昭和 56）年 10 月撮影（狛江市所蔵）

そして，1981 年 6 月，伴は登戸研究所跡地である生田キャンパスを戦後初めて訪れます。

その際に当時の明治大学生田校舎事務長が残したメモが「生田神社の由来」です。メモには神社が残っていること，さらに伴が使っていた研究棟（44 号棟）が残っており，今も農学部の学生たちが研究の場として使用していることに「（伴は）深く感銘を受けていた」と書かれています。

同年 10 月には，これまで一切偽造紙幣製造について語らなかった第三科長（大佐）山本憲蔵が，責任者として初めてテレビに出演し，その全貌を語ります。「極秘」とされていた第三科の活動を，責任者自らが語ることは，元所員らの心情に大きく影響しました。



『歴史と人物』1980年10月号

1980（昭和55）年10月1日｜中央公論社

「特集 日本の秘密戦と陸軍中野学校」。伴繁雄「秘密兵器を作った登戸研究所」，岡田芳政「中国紙幣偽造事件の全貌」など所収。元所員が一般に対して実名で全容を語った最初期の例。

生田神社由来の一つ

生田校舎

昭和五六年（一九八一）六月十六日午後、伴繁雄氏の訪問を受けた。

伴（ばん）繁雄（しげお）氏

元陸軍少将（技術）・陸軍省の技術研究官員

中野学校 教官

伴氏は中央公論社「正史と人物」（月刊誌）五五年十月号に「秘密兵器を作った登戸研究所」なる戦時中を回顧した文章を

発表された。

これにもとづいて ある会合を経て、この登戸研究所が現在の明治大学生田校舎であり、当時をしのぶ物的なものがあるか、について NHK プロデューサーの関心をひくこととなり、今回より前に NHK から生田校舎を調査にきた。

生田校舎は 本館が農学部校舎、経営学部（暫時使用）、工学部校舎と使用して整備をつづけ、現在では当時を偲ぶものとしては、周辺の開発により変化したとはいえ 概観的に変らない地形キャンパス内の木立の一部、農学部、事務が使用する木造、コンクリート 建物、陸軍マークの入った消火栓、そして神社といった

ものである。 このうち神社が現在することについて 伴氏は関心を寄せられたのである。

それは、この地に神社を建立するに至った 経緯の中心にあったからである。

陸軍第九科学研究所（登戸研究所）は、その創立は昭和二年 千仞（せんじん）学校（軍隊名）に陸軍科学研究所として出発したという。 昭和十四年 それまで 拓殖学校が使用していた この地に移転したのという。

この研究所は、「秘密戦」用の兵器の研究、製造を目的としていた。 軍事 ニセ札、そして風船爆弾などが代表される。

そして昭和十八年 日支事変における ここの成果に対して 当時の東條首相、陸相から 陸軍技術有功賞という物を受けた。

副賞の金武萬圓を受賞と同時に、当時の研究所長 陸軍中将 篠田 鎌吉（かまきち）閣下より相談して、何か有意義に使うことを勧告して 陸軍省に これを寄附した。 協議の結果 この研究所に神社を建立することになった。

そこで、研究所では 秘密戦 兵器として作製したための実験や作製過程で事故のため死亡した人々の慰霊をこめ 技術・研究開発の神を祀ることにした。

名づけて、彌心（みこころ）神社と称した

本学の使用するところとなり、生田神社の由来はさだかでなかったが、五代地元の古老などの話をもとに それなりの祭りをつづけてきた。

現在（五六年）では、生田祭に当り神官を招じ、修祓式を行なっているが、神社は、

農学部、工学部といういわば生産の業に通じるものの神として、豊受大神を、学生 教職員を守り 本学園係者の安寧と繁栄を、そして生田校舎を中心とするここ川崎市多摩区の弥栄を祈念して 天照大神をお祀りしている。

毎月一日を基準として 神社の清掃をなし、祭り拝もあるようで、地域の人々と思われる 信心深き方々が祭り 入学試験期には合格祈願も行なわれる。

伴氏も、神社の現存することを聞き 早速思い出の生田の地を訪れたとのことであるが、工、農学部といういまもなお、この地が技術、研究開発を基本とするところであり、祭りのおこなわれていることに 深く感銘した様子であった。

校内を退案、四六号棟内当時の自室をみて感慨ひとしおのようであった。

（昭和五六年六月二二日）

「生田神社の由来」 1981（昭和 56）年 6 月 22 日｜明治大学生田校舎｜明治大学所蔵　伴繁雄が戦後初めて登戸研究所跡（現・生田キャンパス）を訪問した際に，大学職員が作成したメモ。